

## アナトール・フランスの歴史小説

——《ユダヤの太守》について——

加 藤 林 太 郎

—

短篇集《螺鈿の手箱》(L'Etui de nacre 1892)には、いくつかの歴史小説が集められているが、その冒頭を飾る《ユダヤの太守》(Le Procureur de Judée)はアナトール・フランスの歴史小説中の白眉であろう。キリストの受難に責任を有するがために、歴史に名をとどめることとなったユダヤ総督ポンティウス・ピラトウスの苦い回想を物語るこの作品は、実に見事な幕切れである。そして《Jésus le Nazareen》の名を記憶にとどめていないピラトウスの物語は、その見事さのために、しばしばアナトール・フランスの「技巧」を代表する作品として紹介される。しかし、この一篇は、技巧のみではなく、むしろ技巧と主題の快い混合に、その短篇としての成功を負っているのである。再度の成功を狙って書かれたらしい《Gallion》(Sur la pierre blanche, 1905)の場合は、全くの同工異曲でありながら、主題のみが前面に押し出され、二番煎じの印象を強めることとなっている。

アナトール・フランスの小説の技巧を問題とする時、最も有効な視点は、多くの作品が何らかの「否定」を目的と

していることであろう。そしてこの短篇の結末に於て「否定」を受けるのは、読者の「常識」であろう。イエスの布教と受難とは人類の歴史中最大の事件と考えられるけれども、同時代人の心の中では、その事実のあった通りの大きさに縮小されてしまわざるを得ない。極めて重大であると認められている歴史上の事件に対し、事件の当時者、同時代人の意識を突然開示して見せるのは、まことにたくみな否定の技法であろう。彼の作品のそここに、この効果的な否定の方法が用いられているのを我々は見出すことができる。

世界史の中のもう一つの大事件である一七八九年の革命もアナトール・フランスの歴史小説に屢々とり上げられた。大革命に関する資料の蒐集で有名となった父の書店で、一七八九年の革命が彼にとり、どれほど身近かなものであったかは既に十分述べられて来た事柄である。しかし、結局、アナトール・フランスは大革命の指導者達の誰かを彼の作品に描くことはなかった。バステュー陥落後のパリ市長バイイーに就いて書くようにしていたと云われるが、この書かれざる作品の主人公の選び方にも、非常に *délicat* なものがあることは感じられる。結局、一七八九年の革命は、一介のジャコバン党员と彼をめぐる *obscur* な人々の物語、《神々は渴く》(Les Dieux ont soif, 1912) となったが、この作品の先駆となる短篇群も、またそれぞれ否定の作品であると云ってよいだろう。バステュー陥落の日パリ郊外の午後を描いた《夜明け前》(L'aube) [L'Etui de nacre 所収]では、亡命も護送馬車もギョチンも未だ知らぬ男女の期待と夢が語り交わされ、シャイヨの丘の夕暮は、この七月十四日がまだたしかに十八世紀であることを悲しいほどに感じさせる牧歌的な光に満ちているのである。

《神々は渴く》の「神々」以外のパリ人達は、食うことと愛することに余念がない。彼らはやむを得ず栗を常食とし、娘の父の帰宅時間を測りながら愛を語る。マリー・アントワネットを乗せた護送馬車、マリーの暗殺などは影絵の様に舞台の背景を過ぎて行く。あらゆる事件が彼らの心の中で日常的な貧しいものとなる。彼が《ペンギンの島》

(*L'Île des Pingouins*, 1908) で我々に示す歴史の残酷なパロディ化と異なり、極めて静かではあるが特有の魅力をもった歴史描写がここに示されているのである。謂わば風景画を描くのにその土地の土を以てすると云ったシニツクな手法である。現代人の評価、現代人の感ずる意義を歴史から抜き去って見せる。これがアナトール・フランスの歴史小説である。「常識の逆撫で」「偶像破壊」などとも評されるこの手法は、しかし、歴史にばかり適用されるとは限らず、また、一般の常識を対象とするとも限らない。《村医者の手記》(*Le manuscrit d'un médecin de village*) [*L'Étui de nacre* 所収]の中で、脳膜炎で死んで行く天才少年は、偶然、幼い頃の大アンペールの肖像と生写しであつた。この肖像を見て医師は一年前、レ・ザリの農家において死の手に奪い去られたものの値打と意義とがいか程のものであつたかをはっきりと覚るのである。これら短篇の目的は寓意の表現であるかも知れない。しかしこれらの「無知」に関する寓話を書きつつ、作者はある種の詩情をさえ感じていた様に思われるのである。

「過ぎ去つた時代の精神を感じとり、過去の人々の同時代人となるためには」と彼は《ジャンヌ・ダルクの生涯》(*La Vie de Jeanne d'Arc*, 1908) の序文で述べている。<sup>(1)</sup>「気長な研究と愛情のこもつた心遣いが必要だ。しかし困難は何を知らねばならぬかではなく、何を知らずに置くべきかにある。もし本当に我々が十五世紀という時代に生きようと思うなら、一体どれだけ沢山のことを忘れねばならないことだろう。いろいろな科学、様々の方法、我々がそれを有するがために現代人となっているあらゆるものを忘れねばならないのだ。我々は地球が円いことも、空の星が固体であつて天の円天井につるされたランプではないことも忘れねばならない、またラプラスの宇宙説を忘れて聖トマスやダンテの科学、あるいは天地は七日間で創造され、諸々の王国はトロイの滅亡後ブリアモスの息子達によつて建設されたと教える中世の宇宙形状誌学者の科学だけを信じなければならない。歴史学者、古文書学者は少女ジャンヌの同時代人を我々が理解するのに何の役にも立たない。彼に欠けているのは《le savoir》ではなく《l'ignorance》

即ち、現代の戦争、現代の政治、現代の宗教に対する『*l'ignorance*』こそが欠けているのである。」たしかに、彼の四冊にもものばる「思い出」も、少年の日の彼が何を知っていたかの物語ではなく、「何を知らなかったか」の物語である。幼いピエールが知らずにいたのは、『*mon ami*』でもあり時に『*chienne*』とも呼びたくなる『*vie*』なのだと作者は云うであろう。アナトール・フランスもまた、十八世紀の作家が屢々そうであったように、人間の様々な無知の研究家であるが、彼の最も親しんだ「無知」は、人間の、歴史に対する無知であった。『ユダヤの太守』は、彼の作品の中で、まさにこの『*l'ignorance*』をもっとも見事に芸術化したものであろう。『ガリオン』と『ユダヤの太守』とのちがいは、主人公達の『*l'ignorance*』が突然示されるか否かだけなのである。この様に「缺點がない」と評されるこの作品の技巧が目的としたものは、アナトール・フランスの歴史小説の重要課題のひとつであったのだが、『ユダヤの太守』と『ガリオン』は、『*France s'est toujours passionnément intéressé aux premiers contacts de l'autorité romaine avec le christianisme.*』<sup>(8)</sup>と断定させるに足る特殊性をもっている。この短篇は「異教世界と最初のキリスト教徒との接触」というこの作家の好みの主題にはつきりと結びついているのである。

## 二

アナトール・フランスは歴史の中で、特に「古代の終末」のみを扱ったのでは勿論ない。彼のとり上げた歴史の時代は非常に広範に亘り、古くは吟遊詩人ホメロスの晩年を描いた『*キメの歌唄*』(『*le Chanteur de Kymé*』 [Les Contes de Jacques Tournebroche, 1908 所収])がある。また人類の歴史をも数度に亘って物語っている。『*白き石の上にて*』、『*天使の反逆*』(『*La Révolte des Anges*, 1914) ではないずれも登場人物の一人によって三千年の世界史が物語られる。また『*ペンギンの島*』はフランス史のパロディにはかならない。そして彼の作品を恣意的に配列する

ならば、彼はキリスト教史の各時代をも物語っていると云えよう。ベツレヘムへおむく王の一人を主人公とした《バルタザール》(Balthazar, 1889)をその第一頁とし、イエスおよび使徒とローマの統治者との出会いを扱った《ユダヤの太守》《ガリオン》がこれに続くであろう。次に《タイース》(Thais, 1890)を始めとする多くの改宗物語が見られる。中世紀の聖者伝はまた彼の最も愛する主題のひとつであることはよく知られている。そして《現代史》(L'Histoire contemporaine, 1897~1901)が地方都市の司教任命をめぐる聖職者達の確執を中心に発展して行くこと、更には、政治的パンフレットである《教会と共和国》(L'Eglise et la République, 1905)をもこれに加えるならば、彼の「キリスト教史」は完結することとなる。この《série》の中で、キリスト教の初期時代は、たしかに一短篇《ユダヤの太守》の存在によって印象づけられているのである。

ピラトウスの《Jésus le Nazaréen? Je ne me rappelle pas.》<sup>(8)</sup>は、短い言葉のうちにキリスト教の不明な起源を表わしており、突然の意外な結句をなしているため、技巧として成功であるけれども、同じ主題を再びとり上げた《ガリオン》はアカイア総督ガリオとその友人であるローマの知識人達が宗教の未来を議論している折も折、新しい世界宗教の使徒パウロに遭遇するという、きわめて観念のあらわな作品である。そしてアナトール・フランスは、観念が芸術化されることを余り熱心に求めているわけではない。《ガリオン》は従って芸術化の配慮には乏しいけれども、それだけに前作《ユダヤの太守》が帰すべき主題をより明らかにしてくれている。

《ガリオン》は《白き石の上にて》にきわめて自由に挿入された短篇であり、次にこれに対する《jugements》が討論の形式で進められる。そこでキリスト教とローマ帝国の接触に関する逆説が更に続けられるのである。ローマを以て《un empire sans fin》であると信じ、また神々の支配は不滅ではないと考えるにしても、《le gouvernement de l'univers doit passer à Hercule.》<sup>(9)</sup>と思ひ込んでいたガリオらのローマ人達が、何ら世界の未来に対して正しい

認識を持っていなかったのは勿論であるが、この《Paul ou Saul, originaire de Tarse》の主張に彼らが耳を傾けたからと云って、未来の正しい認識が得られたとも思えないというのである。使徒パウロ自身、キリスト教の未来に關しては何の予見も持っていないというのがその逆説である。キリスト教はその後間もなく、パウロやキリスト教初期の使徒等の觀念から、殆ど全く離れてしまふに至る。《Qui fait une religion ne sait pas ce qu'il fait》<sup>(5)</sup>なのである。人間の大きな制度例えは《ordres monastiques, compagnies d'assurances, garde nationale, banques, trusts, syndicats, académies et conservatoires, sociétés de gymnastique, soupes et conférences.》<sup>(6)</sup>をこしらえた人の場合に就いて、いつもこのことは真実である。特に宗教は活動的で絶えず思想の動いている国民に於ては、崇拜者の思想に従つて不斷に変化して行く。聖パウロは故に近代のローマに再び生れて来たとしたら、《Le dôme de Saint Pierre, les stances du Vatican, la splendeur des églises et la pompe papale》<sup>(7)</sup>に彼は茫然自失してしまふに違いないのである。ピラトウスの意識をとり上げることによつて、キリストの受難を歴史の中に相對化した作者は、パウロを引合いに出すことによつてキリスト教の二千年に逆説的な光を当てたのである。

彼が次に行うものは、誰もが常識としてゐる《la fin lamentable du polythéisme romain》に對する逆説的解釈であつた。ガリオラのローマ人達が精一杯の知慧で、オリンポスの神々の中から次の支配神としてヘラクレスを選んだのは、なるほど愚かしいことではあつたけれども、新しい神の名はエホバでなく、實際ヘラクレスであつたかも知れない、それでも結果は同じだというのがアナトール・フランスの逆説的解釈である。先に述べた様に、宗教は他の人間の制度と同じく創始者の意圖どおりにはとどまっていなかつたと考えられるが、宗教交代によつて去つて行く宗教の側にも勿論同じことが言えるのである。彼が《現代史》の中に於ても一章をこれに当て、また《白き石の上にて》で再びとり上げたユリアヌス皇帝に關する考察は、この宗教交代を勝利と敗北の明瞭なひとつの劇というイメージから

外らせる意図を有している様である。

イスラエルの神がローマに到来することを希っていたのは、単に民衆の心ばかりではなく、哲学者の心も亦そうであつた、ということが指摘できる。当時の哲学者は皆ストア派の哲学者であり、唯一神を信じていた。プラトンはその神のために預つて力があつたのである。その神は人間の姿をしたギリシヤやローマの神々とは無縁であり、無限性という性格に於てユダヤの神に似てると云えそうである。セネカやエピクテトスは自分達の崇敬するこの神とユダヤ人の神とを比較したらその酷似に驚くに違いない。彼らは知らずして、ユダヤ、キリスト教徒の厳格な一神教を一般人に受け入れやすくすることに非常に貢献したと云えるのである。ストア哲学の尊大とキリスト教の謙譲との間にある距離はなるほど大きいけれども、セネカの道徳はその厭世感と自然輕蔑とによつて福音書的道德への先驅をなしていると考えられる。それから二世紀たつてコンスタンチヌス帝の時代になると、異教徒とキリスト教徒とは、謂わば同じ道徳、同じ哲学をもつていたのである。コンスタンチヌス帝の廃止した旧宗教の再興をはかつたユリアヌス皇帝は、なるほど《ennemi des chrétiens》ではあるが、この皇帝にして、キリスト教徒と同じ思想を多量にもつてゐるのに驚かされると彼は言うのである。

ユリアヌス皇帝はガリラヤ人と同じように《monothéiste》であると結論してよさそうだ。禁欲、断食、苦行等の功德を信じ、肉体の快樂を侮蔑し、婦女子に近ずかないことは神の氣に入ると考えている。ひげの汚れていることや、爪の黒くなつてゐることを随喜するに至つては、キリスト教思想を極端に押し進めてさえいると見てよさそうである。ユリアヌス皇帝は《saint Grégoire de Nazianze》と殆ど同じ道徳を持っていた、と彼は結論するのである。従つてこの哲学者皇帝が勝利を収めガリラヤ人を打ち負かしていたら世界文明は果してどうなつていたか、という歴史家の不安な自問は余り大した意味はない。もし万一そんな事態が起つたとしても、ユリアヌス皇帝の時代から既に

一神教に傾きかけていた多神教は必ずや新時代の人々の慣習に従うにちがいない。《le fils d'Alcmène》であつて生粋のオリンポスの神であるヘラクレスでも、《le père de Jésus》と違つた方法で世界を治めはしなかつたであらう。彼もまた《le dieu des esclaves》となつて新しい時代の宗教的精神をとらなければならなかつた筈である。それが今日のキリスト教に見られると同じ様な道徳的形態を取つていたであらうことは確實だと云うのがフランスの繰り返す主張である。《des transformations des mœurs et des idées ne sont jamais soudaines》<sup>(8)</sup>と云う言葉は、変革に關するロマンチズムに對立した立場の表明にはかならないが、ここでは《Les plus grands changements de la vie sociale... Ceux qui les traversent ne les soupçonnent pas》<sup>(9)</sup>という一面に於いてそれが示され、《エヌダヤの大守》《ガリオン》二つの短篇の寓意となつてゐるのである。それと共に彼の読者は、歴史の中における劇的な変革に對するアナトール・フランスの懷疑を感じるべきであらう。宗教の交代という歴史上の最重要事項はこうして高踏派的な臆想にふさわしい壮大ではあるが静かな推移となるのである。彼が《エピキュールの園》(Le Jardin d'Épicure, 1894)で自然科学の説明を借りて述べる変革のイメージはたしかにバルナシアン的なものである。《C'est sans fureur que les mers changèrent de lit et que les glaciers descendirent dans les plaines, couvertes autrefois de fougères arborescentes》<sup>(10)</sup> こうしたリリシズムが自然科学に親近性を見出しているように、宗教の変化に對するアナトール・フランスのイメージも風俗と宗教の關係という極めて合理主義的な解釈に足をつけているのであることは注意すべきであらう。《白き石の上にて》の討論者の一人ニコール・ランジュリエが述べる次の様な公式《Le christianisme ne s'établit que lorsque l'état des mœurs s'accommoda de lui et que lui-même s'accommoda de l'état des mœurs. Il ne put se substituer au paganisme qu'au moment où le paganisme vint à lui ressembler et où il vint à ressembler au paganisme》<sup>(11)</sup>は歴史科学の公式と見えるけれども、アナトール・フランスはそこに



ある種のリリシズムを見出すのであり、彼の逆説はただ知的に構成されたものではなく、キリスト紀元第一世紀に対する彼の《imagination》を諸短篇において解放するのに役立っているのである。

## 三

アナトール・フランスの歴史小説はこの様にパラドクシカルな手法を用いたものであるけれども、それは簡単に、歴史の中における正負の見境が、その中に生きる人々にとっては必ずしも明らかでないことを示すことにある。この様に謂わば《nuées épaisses》の中に住むことを人間は運命づけられているのであるが、この《nuées》の中で道に迷ったもの、歴史の中の「敗者」を語ることによって、彼の歴史小説の性格は決まるのである。歴史の中の《condamné》とも云うべきポンティウス・ピラトウスを主人公に選んだことは、彼が大革命時代のバイイについて書こうとしたのと同じく、無造作な様でありながら、デリケートな人物選択だったと思われる。しかし異教世界の終末を多角的に描いて行くこれらの歴史小説の中に、亡ぶ側として、元来主役である筈なのは異教の神々であった。《Le grand Pan est mort》という不思議な声と共に、全ての古き神々は亡んだりせず、森と泉と原野には未だ多くの神々がかくれ住み、伝導者達は至る所で彼らと出会う。中世紀に至るまでは修道僧はいつ終るとも知れぬ異教的靈力の中に生きていた、と彼は述べている。伝説の紹介をよそおい、観念的で寓話的なアナトール・フランスの小説は、これらの小さな神々をもその小説の登場人物とすることができたのである。

復活祭が近ずくと、冬の間は静かであった森にも泉にも、聖水と聖ヨハネの福音書で追い払われた筈の妖精達が帰って来る。木々の茂みは小さな彼女達の姿で一杯になる。《Ma vie se passe à lutter contre les fées》<sup>13</sup>と隠者セレストアンは歎息する。と隠者は森の小径で羊の足をもった牧羊神の一人アミクスに出会うが、この人なつっこい、素直

な異教の小さな神に主の秘蹟を理解させることは遂にできなかった。隠者に好意をもつ牧羊神は、しかし、復活祭の準備をいそいそと手伝うのであり、花々を集めて祭壇に戻って来たアミクスはあたかもさんざしの茂みが歩いて来る様に見えた。それから後も、真の神のささやかな礼拝堂は常に山や森や水辺の花で以て飾られたのである。また《聖サチール》(Le Saint Satyre) [Le Puits de sainte Claire, 1895 所収] に於いては貧しいフランシスコ教団の修道士の誘惑が物語られており、彼のために異教徒の墓からサチールやニンフの亡霊の群があらわれ、ニンフは彼の悪夢の中で齒の抜けた醜怪な老婆に変じる。何日間かこの幻覚に悩まされた修道士は、遂に聖サチールの亡霊と出会うが、この聖サチールなるものは、初期のキリスト教徒と生活を共にし、これを助け、これに仕えたサチールで、その死後に建てられた墓は、幾千万の異教の森の精や、唐箕の前に飛ぶ靱がらのように小さく、軽くなった忘れられた神々の聖殿となっていたのである。

この作品はウォルター・ペーターを想起させると云われるが、彼がここで述べようとしているのは、神々の永遠の消滅の物語である。忘れられた神々の運命はこの様に詩的空想の対象としかならないであらうけれども、イタリア人の宗教的感情の恒常不変を語る《白き石の上にて》の一節は空想ばかりではないのである。現世に実のる御利益しか神に頼まないイタリア人は、昔、神や精霊に頼んだことを、今では聖母や聖者に期待しているとフランスは言うのである。そこで《saints pour la vigne, pour les céréales, pour les bestiaux, pour la colique et pour le mal de dents》<sup>(4)</sup>などが生れる。ローマ人の想像力は結局ユダヤの一神教から《un nouveau polythéisme》をつくり上げてしまった、という考察は民俗学に近い発想を持っているのではないだろうか。実際彼の歴史小説は屢々、歴史学、考古学の研究余滴といった印象を読者に与え、《ユダヤの太守》をルナンが称讃したのも、この作品が如何にもルナン自身の書きそうな小説と思えたからであらう。事実、この短篇はルナンの描いたピラトウスの、後日談として似つか

わしいものである。

歴史を敗北者の側において描くのは、歴史小説に一般的な一つの形式であろう。しかし彼は、キリスト教とローマとの接触も、一七八九年の革命をもこの形式を以て小説化するのである。革命のパリを舞台とした『神々は渴く』では、元の収税請負人プロットー・デ・ジレットのポルトレが描かれる。この旧制度人の一典型とも云える年老いたエビキュリアンが、しかし作者の *porte-parole* であり、主観的感情を与えられたものと見てよい様に、ユダヤ総督であるポンティウス・ピラトウスも『Jésus le Nazaréen? Je ne me rappelle pas』の唯一句を言うために登場させられた木偶と解するわけには行かない。実際、この一篇の魅力を成すものは、公生活の苦い回想を語るピラトウスの肖像にあると言ってもよい。皇帝に捧げた半生の後、今は任地を奪われ、不当な逆境にある前総督が旧友アエリウス・ラミアに語る追憶談に作者の同情がこめられていることはよく分る。また彼の逆境の原因となった人々、彼の水道工事に反対し、彼らのためを思う彼の公正や熱意に反抗した狂信的な民族に対する彼の憤懣も、読者の共感を呼ぶ筆致で淡々と語られる。

彼の描くこれらローマの高級官吏達は、教養あり、公正で、現存の体制に敬意を払い、ローマ帝国の力を意識している姿において、キップリングの描く『*soldats britanniques*』を想起させると云われる。<sup>(4)</sup>しかし、この評は、『白き石』の上にて『のガリオやその友人達、あるいは『タイース』の海軍長官コッタなどによく当てはまるものであり、ポンティウス・ピラトウスの肖像を我々はむしろヴィニイ的だと云うべきであろう。実際のピラトウスがどんな人物であったか、福音書の作者はローマ権力への配慮からピラトウスを実際より公正な人物に書いたのではなかったか、など、歴史の分野に於いては様々の疑問を残している様ではあるけれども、アナトール・フランスが描いたこのピラトウスの肖像は忘れ難いものである。

#### 四

《ユダヤの太守》は屢々、短篇小説の技巧の典型として紹介されるのであるが、我々はこれを《白き石の上にて》に挿入された《ガリオン》と組合せて見る時、一見したところ話の「落ち」としか思えぬものが、アナトール・フランスの歴史小説における主張のひとつに拘わりを持つていることが分る。過去の心理を読みとること、この能力をアナトール・フランスは古代世界のたそがれとも云える時期を選んで証明しようとしたかの如くである。歴史の大きな転換期に立ち会った人々を描いて、『Ils n'ont que des idées de leur temps』であること、ここに作者は自分の作品の価値を認めるのである。従って彼は自信をもって次の様に云うことが出来るのである。《(...) c'est seulement dans les jolis romans destinés aux gens du monde par des auteurs pleins de spiritualisme et d'adresse, que les apôtres de la primitive Eglise conversent abondamment avec les philosophes et les élégants de la Rome impériale et exposent à Pétroline ravi les beautés les plus fraîches du christianisme. Le dialogue du Gallion, que vous venez d'entendre, a moins d'agrément et plus de vérité》<sup>(3)</sup>

《ユダヤの太守》を技巧の面のみで見た場合、きわめてこれに類似するのは芥川竜之介の「舞踏会」であろう。H 老夫人は少女時代、鹿鳴館での舞踏会でワルツの相手となってくれたフランスの海軍将校ジュリアン・ヴィオがピエール・ロティその人であることを認めようとはしないのである。ロティの《秋の日本》からヒントを得たこの短篇は、アナトール・フランスの《ユダヤの太守》を技巧として借りたとまでは云えぬにしても、類似の手法であるのはちがいない。ただアナトール・フランスは、現代人の常識を除き去り、過去の人物と《Le plain-pied》に自らを置くことが、自分の歴史小説の大きな課題だと考えている点に、意識の相違が見られるのである。

アナトール・フランスの作家活動の非常に大きな部分がキリスト教にかかわりを持っていることは明らかであるけれども、その中で、異教とキリスト教の相剋は《コリントの結婚》(Les Noces corinthiennes, 1876)《タイース》を書いた作者の空想と常につながりを持っていた。《ユダヤの大守》《ガリオン》はキリスト教史の最も重要な一頁に對するパロディと考える限り、彼の反抗的姿勢のひとつの表われにすぎなくなってしまうが、この相剋の時代に對して彼が感じている特別な魅力がやはり、これらの短篇を書かせたのであると考えられる。そして彼の主観的感情は、彼がルナンについて云った「起源の歴史家」には彼をせず、むしろ彼をして「終末の歴史家」にしたのである。そしてこの呼び名は、大革命を描く時のこの作家に對しても通用するのではないかと思われる。彼も古典主義者として、ボワローと同じく、没落を意識する《Ancien》だったのである。芥川竜之介の多くのキリシタンものの中に「神々の微笑」という一篇がある。南蛮寺の夜の内陣で、天の岩戸からオホヒルメムチが輝しく現われる幻覚におそわれ、夕暮の庭で影の様な老神から泥烏須<sup>デウス</sup>の日本に於ける勝利がむつかしいことを聞かされるバアドレ・オルガンティノの物語は、「この国には山にも森にも、或は家々の並んだ町にも、何か不思議な力が潜んで居ります。」「この国の霊と戦うのは、思ったよりもっと困難らしい。」<sup>(18)</sup>という神父の述懐を待つまでもなく、アナトール・フランスの《アミクスとセレスタン》(Amycus et Célestan) [L'Etui de nacre 所収]を想起させる。だが、この様に同じく宗教の相剋を描いた二つの作品を区別するものは、《アミクスとセレスタン》《聖サティール》の作者が異教世界の没落に對して持っている強い主観的感情ではないだろうか。ユリアヌス皇帝に付せられる《L'Apostat》の異名をそのままに用いて《Constantin l'Apostat》<sup>(19)</sup>と彼は書いた。ここに彼の歴史小説の逆説的手法だけでなく、その性格もはっきりと見て取ることが出来る。アナトール・フランスの歴史小説は少しも冷静なものではないのである。

- (1) La Vie de Jeanne d' Arc, éd. Calmann-Lévy, Oeuvres complètes illustrées de Anatole France, tome XV, 1929, p. 63.
- (2) Jacques Roujon : La vie et les opinions d' Anatole France, Librairie Plon, 1925, p. 114.
- (3) L'Etui de nacre, éd. Calmann-Lévy, 1923, p. 27.
- (4) Sur la pierre blanche, éd. Calmann-Lévy, 1924, p. 134.
- (5) *ibid.*, p. 166.
- (6) *ibid.*, p. 166.
- (7) *ibid.*, p. 162.
- (8) *ibid.*, p. 177.
- (9) *ibid.*, p. 177.
- (10) Le Jardin d'Epicure, éd. Calmann-Lévy, 1949, p. 46.
- (11) Sur la pierre blanche, p. 177.
- (12) *ibid.*, p. 55.
- (13) L'Etui de nacre, p. 33.
- (14) Sur la pierre blanche, p. 11.
- (15) Jacques Roujon : La vie et les opinions d' Anatole France, p. 114.
- (16) Sur la pierre blanche, p. 155.
- (17) *ibid.*, p. 154.
- (18) 芥川竜之介全集 第五卷〔岩波書店、昭和三〇年〕
- (19) Sur la pierre blanche, p. 176.